走り出したら止まらない

野狐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
走り出したら止まらない

【Ｎコード】
Ｎ３３１５Ｉ

【作者名】
野狐

【あらすじ】
目を覚ました一条壱也は見たこともない光景を理解することなどできなかった。
ここはどこだ？俺は家にいたはずなのに、目の前に見えるのは・・・
他人のことなんて誰も何も考えちゃいないんだ！
世間に嫌気が差していた男の、裁かれることへの恐怖を描く作品。

その一

色々な人間がこの世にいるが、他人のことを分かっている奴なんてほんの一握りだっていやしない。　笑顔で注文を待っているウェイトレスは笑っていても心の中ではこう思っているはずさ。「あぁあ、注文決めてから呼べってんだ、このウスノロが！」とね（もちろん全部が全部じゃあないだろうから断っておくが。だが誰もがどこかで表面とは違う自分を見せているはずさ）。俺も理解されない人間の一人だ。誰しも理解されない部分なんて少なからずその胸の中にある。俺も理解されたいとは常日頃から思ってはいる。だが同情されたり焚きつけられたり知ったような顔でうなずかれたりするくらいなら、理解されるなんてまっぴらごめんだ。

俺は地元の大学を卒業すると、普通の会社へ就職した。毎日が外回りの営業だったが別に嫌じゃあなかった。会社の俺がいた部所内では不倫だの社内イジメだのセクハラだのがあって俺を苛々させたからだ。外回りならばあまり干渉しなくて済むだろう？俺は愛する人を見つけ、普通に恋をして結婚して家庭を持つだけでよかった。だから外回りから会社内での仕事に回されたときに会社を辞めた。

これから俺が話すことは奇妙な話だ。とても真実だとは思えないような話だが、少なくともB級ホラー映画よりはずっと楽しんで貰えると思う。本当の話だから。だから読みたい人にだけ読んで欲しい。くだらないと思うのならここでこのまま耳を塞いだって構わない。信じるもの、そして興味がある人ならばぜひ聞いてくれ。

これを話す理由は、忘れられないからだ。どれだけ時間が経っても季節が変わってもその奇妙な話は頭から抜けない。どうやら無理

らしいのだ。だから話す。話せば少しは楽になるし、何もしないと頭の中にとんでもない大きさのハム音が響いて、ついでに頭痛までするんだ。

これは何回目だろう？六十八回まで話したのは覚えているが（俺の親父が死んだときの年齢だ。親父は冬のくそ寒い朝に脳梗塞で簡単に死んじまったが、あれは働きすぎのせいだと思う。夏じゃないだけよかった）。

俺は話しをすることで救われようとなんて思ったことなど一度もなかった。一度も。ただ不安を軽くしてやりたいと思うだけだ。それくらいは構わないだろう？

もう一つ、誰にもこの話を口外しないで欲しい。約束だ。

では話そう。

あの日は八月の、一番暑い日のことだった。

その夏の日差しは俺の髪や頭蓋骨を抜けて、脳から溶かしだす勢いだった。近所の犬はすっかりアスファルトの地面（それも影の中の）にへばっていたし、たっぷりと入った餌箱が空になることなど滅多になかった。

以前の俺は自分で言うのもなんだが、今とは比べ物にならないくらいキレ易い性格で、つまりあの暑さは俺に対してドーピングみたいな効果を発していたのだ。

ドンドンドン！

アパートのドアを叩いている奴がいる。外にいるのは、一人じゃないな。二人・・・いや三人はいるな。感じで分かる。空気と言った方がいいかな。それにさっき階段を上ってくる音も一人分じゃあなかった（どうせ来るなら俺に悟られないように来いっていう話だ

よ）。奴らは警察（サツ）だろうな。

俺は考えながら窓の方に目をやった。

俺には捕まる権利がある。捕まって当たり前なのだ。何せ二人も殺してしまったんだから。それまでに殺した一番大きなものはゴキブリだったのに。だが待てよ。悪いのは俺なのか？殺っちまったのは確かだが、何の理由もなく人間一人殺す奴なんていない。あのジャック・ザ・リッパーだって女を殺すのには理由があったはずだ。例えば若い女が夜中にフラフラと出歩くことに腹を立てただとか、例えば異常な精神病者だったとか。俺は考え込んでいた。

ドンドンドン！

紺色のカーテンを透して太陽の光が差し込んできている。埃の微粒子は光の中で輝いて、形のない像を生み出している。まるで踊っているかのようにだ。冷蔵庫の低い唸り声が部屋の中に響いていた。外では蝉が忙しなく鳴いていた。その音が脳の中まで入り込んでかき乱している。頭の中でオーケストラの演奏が行われているようだった。

ため息を一つつく。そして携帯電話を広げ、画面を見たが、いつの間にか充電が切れていて真っ暗だった。端には僅かにどす黒い色に変色した血がこびり付いていて、すでに固まっていた。

ドンドンドン！

話は変わるが人間関係において最も大切なものがあるとしたら、何だと答える？俺はそれは「信頼」だと思う。信頼は絆を生み出すし、信頼があれば何だって許せる。信頼が置ける奴になら、金だって貸せる。秘密も話せるだろう？

だがあの女は俺の信頼を裏切りやがった。俺は高級なバッグや財布、それに宝石とかも買ってやった（ルイ・ヴィトンとかシャネルとか、俺は奴に買ってやるために、本を買って勉強までしたんだ）。あいつは「将来は一緒になろうね」だとか何とか言って近づいてきた。だから俺は色々と尽くしてきたんだ。夫婦になるなら金はお互いのものだからな。このヘビースモーカーだった俺が一言でタバコ

を止めたんだぜ。
「タバコは別れた元彼の匂いがするから」
何、止めるまでは簡単だった。酒は刑務所行きの道具で、タバコは金を捨てるのと同じだと考えるようにするまでだ。
あいつの裏切りかい？あいつは外で男を作ってやがったんだ。しかも俺の金で豪遊してやがった。そして俺は知った。あいつは俺をカモにして、この俺を金づるにしてやがるってことを。男も俺の存在は知っていやがった。手に持ったグラスの中の酒が俺の金だってことも。だから俺はそいつらの首をナイフで裂いてやったんだ。その女マユミとその男（こいつは黙って俺の女を盗りやがったから、当然の報いだ。名前は忘れたが）はすぐに死んだ。勘違いしないで欲しいが、俺は彼女を恨んでいたわけじゃあない。俺は彼女を心から愛していたんだ（男は違うが）。ただ制裁を与えただけだ。ただし裏切りは償いきれない行為だから、永遠に反省できるように殺したんだ。
ドンドンドン！
くそっ！しつこい奴らだ。
暑くて重い空気が余計に鬱陶しく重く感じた。
そっと立ち上がると冷蔵庫の前まで、足音を立てないように慎重に進んだ。冷蔵庫を開くと中から空気と冷蔵庫独特の冷たい臭いが漏れ出し、冷蔵庫の唸りは一層ひどくなっているような気がした。よく冷えたミネラルウォーターを一本取り出し、これも音を立てないように飲む。
俺が犯人だっていつばれたのだろう？俺は考えた。だがいずればれることだろうと覚悟していたから以外にも冷静だった。ジャック・ザ・リッパーは結局捕まらなかったらしいが、どうやったんだろうな？
俺は冷蔵庫のオレンジ色の光を見ながら、電源を切っておくんだったと思った。テレビのコンセントも電子レンジもパソコンもＰＳ２も何もかも。そうすれば外の電気メーターだって動かなくて、居

留守を使えたかもしれない。ゆっくりと扉を閉め、後退るようにそこから離れた。

冷蔵庫から離れる途中、何度か止まって警察の動きを探ろうとすると、アパートの廊下に面したキッチン横の擦りガラスに人影が現れた。その影は中をのぞき込むように、グッとガラスに顔を近づけて気配をうかがっている。すると額に突然じわっと嫌なものを感じ、体に汗が噴出するのが分かった。暑さからのものも、冷や汗も全部が混じっている。油を頭からぶっかけられたみたいな、どろっとしていて、重い汗だった。そして心臓が高鳴りだした。俺は心臓を両手で抑え、なるべく息が漏れないよう口をつぐんだ。つまりそれだけ心臓の音がでかかったということだ。外の連中にも聞こえるのではないかと思った。蝉のオーケストラより、冷蔵庫の唸りより、どんなものよりも優先して。

俺は二人を殺した。捕まったらどうなるのだろう。その後を考えると恐ろしくなった。二つの殺人を犯したキチガイの殺人鬼として死刑になるに違いない。汗はますます溢れ続けた。動悸も早くなった。汗が一筋頬を伝って首筋を通り、そのままシャツの中へ入っていく。キチガイか・・・キチガイ。そうだよな。俺はキチガイだ。裏切ったのは、俺の信頼を無視しやがったのはあいつらの方なのに、裁判官のジジイは「犯行は短絡的で酌量の余地はない」とか何とか、勝手なことを言って俺を死刑にするだろう。話しても分かってもらえないだろうなぁ。誰も分かっちゃくれない。

あぁ泣きたくなってきたな。

俺は大きく体を伸ばした。それから顎をしゃくって両目の間を軽くマッサージした。これは俺なりの緊張のほぐし方みたいなもんだ。そうするとあれだけ溢れ続けていた汗がぴたりと止むんだ。どうして落ち着くのかは知らない。ただいつもやっている。それだけのことだ。絶対に理解して貰えないことを悟り、さらに暑すぎる気温が

自分を冷静にさせたのかもしれないし、狂っていただけかも。とにかく俺は落ち着いたんだ。心臓も気づいたときには普通に戻っていた。

耳を澄ますと冷蔵庫と蝉の他に時計の音と、それに外の奴らの話し声も聞こえてくる。

「どうします？」

「・・・いや・・・もう少し・・・」

俺はもう一度水を飲んだ後に、カーテンの横まで行って、隠れるように壁に体を寄せた。そっとカーテンに指をかけて少し除けると、外をうかがった。道の向こう側に白のクラウンが停まっていて、脇に若い男（多分警察官だろうが）が立っている。こうしていると向こうじゃあなく俺の方が奴らを監視しているようだ。俺はスナイパーで奴らがターゲットのようにな。

ここから逃げられるか？俺は窓から下を見た。憎たらしいほどに太陽の光を浴びた雑草が青々と茂っている。裏にある木の葉の隙間から木漏れ日が落ち、キラキラとコンクリートの塀を照らしている。ここを飛び降りて逃げなきゃならないのか？そうするしかないのか？しかしここは二階だが雑草の下には小石が沢山ありそうだぞ。しかもあの塀にだってもしかしたらぶつかるかもしれない。痛そうだ。俺は悩んでいた。

そのとき俺は奇妙な音に気がついた。そしてそれが何なのかすぐに悟った。それは鍵を開けようとする音だった。警察の奴らが大家から鍵を借りて、強引にでも入り込もうとしている。大家め。俺は一度だって家賃を連帯したこともないし、部屋だって汚れちゃあいない。それに夜十時を過ぎたら静かにしているじゃないか。それなのに。俺は思った。だが同時に警察が踏み込んでくるまでにはもう時間がないことも分かっていたのだ。また心臓の音が速まりだした。

俺はカーテンを開き、続いて窓を思い切り開いた。太陽光線が目に入り、一瞬目の前が真っ白になる。下の若い奴が俺を見つけて何やら慌てた様子で電話をかけている。俺は下を見た。やっぱり痛そ

うだと思った。
　ふふふっ、これは別に笑い話じゃあないんだが。もしあのとき両手を壁につけて潔く警察の奴らに捕まっていたなら俺はこんな話はしていないだろうし、俺自身もずっと楽な人生を進めたかもしれない。もちろん最後は死刑で終わるだろうが、塀の中の方がずっと俺を守っていたはずだ。
　ガコンッ！
　背後で音が響いた。ついに入り込んできたのだ。しかも土足で。地響きに似た足音と俺の心音とが混ざり合っておかしな音楽が鳴っている。肩越しに振り返ると血相を変えたスーツ姿の男数人が、スーツの胸の辺りに手を突っ込んで走って来る。
「警察だっ！」男が叫んだ。
　俺はミネラルウォーターのペットボトルを投げつけたが、そいつは虚しくもテーブルの端に直撃してスーツの男の足元へ転がった。さらに蹴り飛ばされたペットボトルは回転しながら床を滑り、ベッドの足に当たってようやく停止した。
　大声が下からも後ろからも聞こえてくる。だが俺にとっては蝉の鳴き声と同じで結局は何と言っているのか理解することはない（あいつらだって理解しないんだ）。
　俺はもう一度外を見た。視界がなくなるほどの光が俺を照らしていた・・・

その二

「今何時だ？」

俺はマジにそう思った。俺はてっきり眠っていると思っていた。耳に何がざわざわと雑音みたいなのが聞こえ出して、どうせ野良猫がゴミをあさってやがるのか何かだと思っていた。ついでに、あれは誰も片付けようとしないから、こんな夏の暑い日には臭くてたまらない、とね。だがそれは違った。

目を開けると、俺は目の前の眩しさに目を開けていられないほどだった。その瞬間に俺は思い出した。殺しで警察に逮捕されそうになったんだって。それで俺は窓を開けて、外に飛び出そうとしてたんだと。だからこの光は太陽の光だと思った。しかし何かが違う。太陽の光はこんなにむかつく光じゃあないからな。目の前の光は確かに黄色とオレンジ色が混じった色をしていた。そして俺はどこか、高台の上に手摺をつかんで乗っている。多分十二・三メートルはあったと思う。以前どこかで見た飛び込みの名所の橋がこれぐらいだったからだ。

雑音の正体もはっきりと分かった。高台の下、ステージを囲むようにして人（人かどうかは知らないが）が、群集が見える。ざわめきはそいつらの騒ぐ声だった。顔は見えない。そこにはスポットライト以外の灯りはなかったから。その向こう側は真っ暗だった。

黄色い楕円形のステージ（黄色の下地に赤色の模様が散りばめられている）を囲む観客達はざわめき、ステージはスポットライトに照らされ、それらは飛び回るように駆け巡っている。ステージには

十数メートルの高台が設けられ、俺はその一番高いところに立っている。これが俺の置かれていた状況だった。
俺は自分の身に何が起こったのか、全く理解できなかった。もう一度言うが俺は警察の奴らに追われて、それで逃げようとしているところだった。なぜ自分がこんなところにいるのか、このときにそれがすぐに分かる人間なんているか？いやいないね。この状況は異常だった。逸していたんだ。
ひときわ大きな歓声が観客席から溢れた。俺はその場に座り込むと、見渡すように下を見た。すると中央に何やら人らしき姿が現れて、それで観客は静かになった。鮮やかなステージカラーと同じ赤と黄色の服に、真っ赤な三角帽子を決め込んだひょろりとした男。高台の上からだったがよく分かった。その男が帽子を持ち上げて顔を俺の方にひょいと向けたとき、そいつがピエロだと分かった。口元を曲げて笑うと、観客に手を振って応えた。そしてマイクも何もなしで突然に話をし始めた。
「レディース・アンド・ジェントルメン。本日のご声援まことに感謝いたします。我らが贖罪のサーカス、本日ご覧いただく種目は、サーカスの花形・・・空中ブランコ」
その声に俺は震えた。少なくとも俺は、これまで特にこれといって怖いものなんて持っていなかった。だがその声には体が勝手に反応して震えだした。これまでに聞いたことのない、どっしりとした重低音で、この空間の隅々まで響いている。耳の奥まで入り込み、ずっと頭の中に残る声だった。乾いていて、猛獣の咆哮のような、空気が振動しているのを感じるくらいだった。俺は咄嗟に耳を塞いでいた。しかしバランスを崩し・・・慌てて手摺にしがみついた。
男が話し終わると歓声はまた元の状態に戻った。
「冗談じゃない」俺は呟き、慎重に振り返るとさっさとここから降りてしまおうと考えた。だがそれは叶わなかった。振り向いたそこは高台の細い道が続く薄暗がりで、その群青色の闇の中からさっきのピエロが現れたのだ。

心臓が口から飛び出てもおかしくないほどの衝撃を受けた。現れたピエロが俺をのぞき込むようにしてそこに立っている。俺はその場で飛び上がった。俺が観客だったらその姿がどんなに滑稽だったことか。驚きのあまりそこから転げ落ちなかったのが不思議なくらいさ。そう考えれば俺はついていたのかもしれないが。

だが驚きはなくならなかった。明かりの下に現れてピエロの姿が一層鮮明に見えた。服からのぞかせている体の部分はどこも真っ白に見える。だが塗っているのではなく、元々の色がこうだということも分かる。口元は大きく半円を描いて笑い、淵が赤く枠取りされている。鼻には大きく赤い、真ん丸の付け鼻（もしかしたら本物かも）があり、ヒクヒクと動いていた。一番驚いたのは目で、目の周辺こそ赤い星型のペイントをしているが、その目の中には確かに何もなかった。落ち込んだ眼窩には深い闇があって、どこまで続いているのかは分からない。ピエロが一歩一歩俺のところに迫ってきた。するとその沈んだ瞳の闇の中から、ピエロの足音が聴こえてくるようだった。もしくはピエロの心臓の音が。さらには普通の一・五倍ほどもある大きな手。指が以上に長く不気味に動いている。大きな靴は先がピンと尖がっていて、歩くたびにコツコツという乾いた音がした。

ピエロはすっかり体全体をスポットライトの中へさらけ出して、俺のすぐ前まで迫っていた。立ち止まって、俺に体を寄せてくる。俺は身を高台の端ギリギリのところまで引いて構えた。息さえも出来なかった。ピエロはその不気味な顔を俺に近づけてじっと俺のことを見た。不思議なのだ。暗く沈んでいるだけで、やつには眼球がない。なのに俺は確かに奴に見つめられているのを感じた。奴の視線を感じ、首筋を汗が流れていくのが分かる。警察に捕まりそうだったときにも、殺人を犯したときにもこんな冷たい汗をかいたことなんてないのに。そして俺は自分が恐怖を感じているのに気がついた。俺はこのピエロを恐れていたんだ。

ピエロはやっとのことで身を引くと少し猫背気味の姿勢で立ち、

首を傾げてその長い指で頭を掻いた。ピエロからは甘い香りが漂っていた。チョコレート、キャンディー、ガム、ロリポップ、キャラメル、ラムネ・・・小さいガキどもが食べるようなお菓子の香りだ。誰でも嗅いだことのある甘い香り。俺は無意識のうちに鼻をくゆらせていた。

「どうした？なぜ飛ばない？」

その声に俺ははっと我に帰った。

手はだらりと下に垂れ、首を真っ直ぐに戻す。あわせてゴキゴキと首が鳴る音がする。くぐもって乾いた声。

「さぁ、早く飛ぶんだ。みなが待っている」

ピエロの唇は動いていなかった。笑ったままの形で喋っている。そしてその声は空洞の両目の中から響いてきている。俺は下を見た。それからピエロの顔を見た。それを二度三度と繰り返した。俺は何も知らない哀れな男を演じたが、どれだけの効果があったのか。多分効果などなかっただろう。

「おい、ちょっと待ってくれよ。おい、おい・・・何なんだ？一体、ここは？」俺は懇願するように言った。何と弱々しい声だったことか。俺のその声はかすれて、震えていた。

「貴様にはここで空中ブランコをしてもらう」ピエロが話した。「貴様はここで罪を償え」

「待てって。待てよ・・・俺が何したんだ？」俺は言った。

本当は何のことかなんて分かっていた。俺は警察に捕まるのも覚悟していたくらいだからな。殺しのことだろ？分かっていたんだ。

「貴様は何人の命を奪った？二人だ。その罪を償ってもらうぞ」とピエロの声。

スポットライトが俺とピエロのいる高台の上に集中した。俺は腕で光を遮りながらピエロの方は見なかった。歓声は大して気にならなくなっていたが、俺はピエロの声が聞こえてない振りをした。周りを見渡す。今まで気がつかなかったが、スポットライトの灯りの向こう側、闇の中にテニスボールくらいの小さな光が幾つもついた

り消えたりしている。その光は赤、紫、青、黄色、それに緑や白など様々だった。ここで俺は奇妙にも昔見たテレビコマーシャルのことを考えていた。液晶テレビのＣＭだったと思う。どこか異国の国の・・・昔フルハウスってアメリカのホームドラマがあっただろう？あのサンフランシスコの街みたいな、街中が坂になっているところだ。早朝に、坂の一番上からスーパーボールを転がすというもので、その数は数十とか数百とかいった、しけた数じゃあない。色とりどりのスーパーボール数十万個。このスーパーボールを一気に転がすのだ。朝早く人通りのない町に、まるで雪崩のように転がっていくボール。遥か彼方からの太陽の光を受けたボールは縦横無尽に跳ね回り、アスファルトの斜面、駐車された自動車の屋根やボンネット、それに家々の窓やドアを打ち鳴らしながら落ちていく。雨樋からはスーパーボールに押し出されるようにカエルが飛び出し、塀の上では猫がその光景をのんびりと眺めているのだ。バックミュージックの豊かさも加わり、それはただ美しいだけではなく、それ以上に芸術だと思った。ただのＣＭの枠を超えた芸術作品だと思った。

だが俺の今いるこの場所には太陽の光なんてものはない。小さな光は真っ暗な闇の中に浮かんでいるだけだったんだ。同時に俺がどうしてこんな目に遭わなきゃならないのか、むかついたね。冷静さもあったが・・・それは恐怖心からくるものだった。

こいつは俺のことを殺そうとしている。そんなこと分かりきっていたさ。だが情けない話だが、死ぬのは怖かったぜ。殺しの罪を償うのにムショに入れられようが、それは構わないが。死ぬのは怖かった。それが恐怖を増幅させた。

俺は大きな呼吸を二つして、両目の間を揉んだ。こうすると落ち着くんでね。俺はそっと立ち上がり、そしてにやりとピエロに笑いかけてこう言った。

「確かに・・・俺は二人殺したが・・・それには理由があるからだぜ？何も俺が全部の原因じゃあねぇんだ・・・だから・・・」

「殺しを認めるな？」少し強い口調でピエロが返す。

「認めるさ。認める。だがそれはお前らの基準だろうが。そうだろ？」俺は三文芝居を演じて続けた。「俺にも言い分はある。あいつらは死んで反省する必要があったんだぜ。あいつらが何をしたか知っているのかよ。あいつらは俺を裏切ったんだぜ」

ピエロがまた首を傾ける。ゴキゴキと骨が軋む。傾けた頭には僅かに朱色のちぢれっ毛がくっついて、揺れている。

「一理ある。だが同時に償う義務もあり、それは消えない」ピエロが答えた。

奴は腕を前に伸ばして闇の中を指した。曲がった指先は妙に骨ばっていて、グロテスクに小刻みに震えているように見える。

「チャンスをやろう」

「チャンス・・・だと？」

「そう、チャンス！」

ピエロの口調がどんどん強くなる。あれが本当に存在する声だったのだろうか？地の底から湧いてくる死霊の呻き声ではなかったか。

「空中ブランコをしてもらう！命綱はなしだ！ここから飛んで、受け手のところまで飛んでもらおう！向こう側へたどり着けたなら貴様の言い分を認めよう。空中ブランコは宙に浮かぶ、言わば運命の振り子。貴様の運命を鏡のように表すだろう！」

だがやはり俺は納得していなかった。

「ふ、ふざけるなっ！俺はやらないぞ！」俺は声を荒げてイライラして言った。すでに喉はカラカラに渇いていたが、振り絞って叫んだ。

「では貴様には死よりも恐ろしいものを味わってもらうだけだ！」ピエロが言う。

「あ、あ・・・」俺は言い返せなかった。口から出るものといえば、わけの分からない奇声と粗い息だけで、握った手の平の中では生暖かい汗がじっとりと溢れていた。それを見ると俺は今にも気絶しそうだった。ピエロは腕を下げ、何も言わず、まるで俺の退路を断つかのように目の前に立ちはだかっている。

今や歓声すらも止んでいた。沈黙が流れた。だが自分の心臓音だけは聞こえた。

その三

「・・・本当に成功したら助かるんだろうな？」ついに俺が沈黙をやぶった。静かな声だった。ピエロの瞳、つまりぽっかりと空いた暗闇を睨む。

「本当だ・・・では」ピエロはピタリと止めると顎をゆっくりと持ち上げ、そして続けた。「では挑戦するとみなすが・・・」

「やらなけりゃあ助からないんだろが！」素早く遮った。

ピエロがまたひょろ長い腕をゆっくりと上げる。その先には白いペンキが塗られた鉄のパイプがあって、滑り止めだろうか、何やら布のようなものが乱雑に巻いてあり、切れ端が垂れ下がっていた。パイプの左右からは細いきらきらと光る紐が、天井の遥か闇の中へ続いている。パイプはライトの光で不気味に光っていたが、俺にはそれが希望の光ではなく、絶望の前の最後の光にしか見えなかった。ちょうどあの世へ行く人間が、長く暗いトンネルを抜けた先で見るという光だ。あれは死の光に違いないと感じる他はなかった。

俺は開き直って振り返るとパイプを手に取った。左右の留め金が外れて、俺は今にもパイプに引っ張られて遥か下へ引きずり落とされそうになった。思い切り後ろへ体を傾けて何とか凌ぐ。パイプをぶら下げる紐の先、天井の闇の中でガランガランと金属音が鳴り響いた。ますます無気味に思えた。反射したパイプの光は死の光だった。そして今度のその音は教会の鐘の音ではなかっただろうか？この俺の葬式のための。

恐怖が体を駆け巡る。噴出す汗はどれも冷たいものばかり。パイ

プを握った手がブルブルと震える。足が床に着いていないかのように感じ、俺は何度も床を蹴って確かめた。
耳を劈くほどの歓声が再び会場を埋め尽くした。その中には小さな悲鳴も混じっているのだ。観客の空中ブランコに対する狂気にも似た笑いの中に、小さな、まさに恐怖を目の前にした悲鳴が混じっている。誰かが恐怖に叫んでいる。今だから分かるが、あれは多分俺が発していた悲鳴だったんだと思う。前髪はぴったりと額に張り付き、目は一点に収まらず、体は震え、喉の奥には酸っぱいものを感じる。舌が喉に張り付いて、吐き出しそうになった。
「安心したまえ。空中ブランコに適した体重として、一五〇ポンドほどは平気だ。貴様の体重はこうしてみたところぴったりじゃあないか？」
肩越しにピエロの声が聞こえた。奇妙だが大歓声の中でもはっきりと声だけは聞こえた。まるで耳のそばに口だけを持ってきて話しかけているかのように。裁判官が罪人に判決を下すときのような、落ち着いた物腰を感じた。そうあいつは死の裁判官だったのではないか。
「黙れ！受け手がまだだ！」俺は叫んだ。
その声が合図となったかのように向こう側から風を裂く気配を感じる。そして群青色の闇の中からバーに足をかけ、逆さ吊り状態の人間の姿が現れた。その影は闇の中でも白く像を保っている。
「さぁ、行くんだ。チャンスは一度きりだぞ」ピエロは妖しい声で囁し立てる。
声が頭の中まで響き、俺はクスリを打ったかのように目の前がぐらつくのを感じた（もしくは高熱を出したみたいだった）。そして俺はいよいよ飛ばなくてはならないのだと、そう認めるしかなかったのだ。
俺の住んでいたアパートから少し行ったところに、大きな道路が一つあるがそこは昼間の交通量が激しくて、ピークにはそこを通り過ぎるのにどれくらいかかるのか見当もつかないほどだ。高架がか

けられた広い道路には、なだらかな坂が上へと続いている。そこでは当たり前のように事故が日々起きているんだが、人間て奴はどうも学習するのが苦手らしくて毎度同じような事故ばかりなんだ。しかも大きな事故はほとんど起きないのを見ると、どうも事故をする人間達はこれから自分が事故に遭うかもしれないってんで運転を制御させているらしい。可笑しな話さ。それならば相手に譲ればいいとは思わないか？まぁそれが出来ないから事故は起こるわけなんだが。俺は事故が起きる度に笑えてしょうがなかった。ところで俺はそんな場所に深夜に行く機会があった。夜眠れなかった俺は散歩に行こうと思ったのさ。先に言っておくが俺が深夜にここを訪れたのは初めてのことだ。俺はその場所に着いたとき、体全体が震え上がるのを感じた。恐怖とかじゃあなく、感動したときに体に何かが走るだろう？あれに似ていた。走っている自動車は一台もなかった。闇に紛れた小虫が鳴いていた。両端にオレンジ色の街灯が並んで続き、夜闇をぽつりぽつりと照らしていた。その美しさといったらなかったね。自分が周りの小虫と何ら変わらないほど小さな存在に思え、体の中にある欲望やあらゆる悪意、その他の幸福、つまり全ての一切合財が闇の中に吸い込まれていった。神聖な何かが創り出している空間がそこにはあったと思う。俺は宗教的なことにはあまり精通していないし、信じてもいないが、それでも主である何かは現存していて、その空間はその主に許しを貰った大芸術家が創り上げたものではないかと本気で思っている。

　主なるものの存在を俺は信じている。もちろん運命って言葉も信じている。運命は存在すると思う。だが運命は決まっているが変えられるもので、矛盾はしているが、俺達人間はそんな不確かなものに喜怒哀楽しながら身を投げつけているんだ。午後から雨が降るかも知れないことを心配したり、息子が始めて立って歩いたことに涙したり、夜の道路が街灯の明かりに照らされている光景に感動したり、そうやって退屈な運命という奴に抗って色を付けようと切磋琢磨している。でも最後には笑うんだ。それが人間だ。小さいことだ

が、しごく面白い生き物じゃないか。そのためには犠牲も厭わない。自分を犠牲にするのだって同じことだ。それで誰かの幸福を買おうとしている。きっと愛されたいんじゃないか？愛されるがための人生だ。これを奇麗ごとだと思うかい？そう思う君には回りに好きな人がいるか？いるならキスをしてやるといい。

話が逸れてしまったな。

しかし喉が渇く。

続けよう。

「これは夢だ、違いない。夢なんだ。夢だ。夢だ・・・」俺は何度も心で言い続けた。

息を止めた。すると周りの音が全て聞こえなくなった。大歓声も。ピエロの声も。

振り落とされないようにしっかりとパイプを握る。パイプを持つ両手の指が青色に変色していくのが見える。

足が床から離れていく。全てのものが超スローモーション映像に見えて、時間を何倍にも引き延ばしたようだった。次第に聞こえてくる風の切り裂かれる音は轟音となる。

俺はついに飛んだ。

えっ？何故こんな誘いに乗ったかって？ははっ、もしもあんたが助かる別の方法があったかも、なんて考えているのなら止めた方がいい。警察に出頭するとでも言うのか？罪を認めないとでも言うのか？他には？言い訳が何になる？俺にすれば無駄という言葉以外に似合う言葉など見つからないよ。最初から奴は俺を助ける気なんてなかったのだから。奴と対面した俺にしか分からない。大体初めての人間が空中ブランコなんて成功させられると思うかい？無理に決まっている。俺はやらないと断りもしたが・・・俺は裁かれるしか、それしかなかったのかもしれない。

俺は空中ブランコを成功させることが唯一の助かる道なんだと本能的に感じた。それ以外はないのだと。そして成功する確率は０パーセントに限りなく近いのだということも分かっていた。ではなぜ

飛んだのか・・・実に簡単なことだ。生きたかったからだ。二人も殺した俺がそう言うのはふざけた話しだし、むしが良すぎると思うかもしれない。だが助かりたかったのだ。死に直面した人間は誰もが思うだろう。俺は死が恐ろしかった。脳裏に今までに殺した二人の最後の顔が浮かんできた。二人とも同じように恐怖し、怯え、震えていた。そして俺も同じだった。

反対側から見える逆さ吊りの影、それが徐々に鮮明になっていく。そして相手の両手がぴんと伸びて俺に向かって差し出しているのを見た瞬間、俺はパイプから手を離し、中空に飛び出した。

手を伸ばし、足で空気を蹴り、ただ逆さの手に向かって体を伸ばす。テレビアニメで空中を泳ぐ人を見たことがあるだろうが、まさにそれだ。ただ見ているだけのものはみな笑っているが・・・やっている方は必死だ。

だが次の瞬間予期せぬことが起こった。観客の連中も、受け手も、ピエロも、もちろん俺も。誰も予想はしていなかったんだ。なんと俺の伸ばした手は、受け手の手を見事に掴んだのだ。掴んだ衝撃で振り落とされそうになったが、俺は掴んだ手を離さなかった。受け手側も同じように固く握っていた。

自然と顔がにやけた。観客やピエロがどう思おうが俺が知ったことではない。俺の中でファンファーレが流れ、祝福している気分だった。

「やった・・・ははっ・・・やった・・・」小さく呟いた。足元は相変わらず目が眩むほど高く感じたが、それ以上に喜びが勝っていた。握った手からは受けて側の心臓の鼓動が感じ取れるようだ。その鼓動が俺に、あのピエロに勝ったのだという実感を沸かせた。

振りが頂点に達し、そこからまた逆側の頂点へ向かって落ちていく度に、振り子の遠心力が直接手に伝わってくる。

「やってやったぞ！おい！早く上げろ！」大声で叫んだ。そして肩越しに高台のピエロを探した。だが振り子からはピエロの姿は見えなかった。

だが俺は気にはしなかった。勝利したのだから。俺は浮かれていた。俺は天にも昇った気分だった。もしもこのあとに何が起きるかを知っていれば、俺はもっと慌ててピエロを探したのだろうし、早く空中ブランコから降ろさせただろう。俺が冷静だったなら、握ったその手の鼓動が早くなりつつあることにも気がついただろう。何一つにしても見逃さず、疎かにしようなどと考えることはなかっただろう。そしてもう終わったのだ、などと浅はかな考えは持つことはなかっただろう。安心だと思った。なんと馬鹿だったのか。

「離さないでくれよぉ、お願いだ・・・」

俺はそれが初めは空耳かと思った。

「気をつけて、気をつけて・・・」

二度目に聞こえたときには、それが本当に聞こえる声だと認めざるを得なかった。

その声は頭の上から聞こえてきた。

「気をつけてくれよ、旦那ぁ。離さないで」

俺は上を見上げた。それは受け手の男で、禿げかかった黒髪に薄汚れた白い作業着。握った手は労働者の手で、深いしわがあって赤茶けていた。この男を見て最初に浮かんだのは駅前の浮浪者の集団連中の顔だ。冬は一斗缶に焚き火を燃やして温まり、夏は裸も同然の格好でベンチに体を預ける連中の顔が浮かんだ。さらにブランコが揺れながらだったが、俺は確かにこの男からアルコールの匂いがしていることに気がついた。その匂いは鼻が潰れるほど強烈で、男が相当飲んでいることを証明していた。声はこの男の発するものだった。

だが男は酔っている風には見えない。この空間ではそれさえも消えてしまうのかと思った。

「何なんだ？お前は」俺は言った。

「俺が誰かなんて、そんなことはどうでもいいんだ。とにかくこの手を離さないで」男が懇願する。男は息を切らして虚ろな目で俺を見ている。

俺の方はというと不信な目で見返した。男の言う通り、俺にとってこの男が誰か何てどうでもよかったんだ。ただこの男の淀んだ目は俺を不安にさせた。
「恐ろしいピエロが、言ったんだ。あんたを受け止めれば助けてくれるって」男は震えながら言った。「掴んだんだよぉ、こうして。だから旦那ぁ」
俺は驚いた。この男も自分と同じなのだ。こうしてあのピエロに試されているのだ。嬉しくもあったが、不安は少しずつ強くなっていった。
「おい！早く！俺を降ろせ！」俺は高台に向かって叫んだ。だが暗闇からの返事はない。次に男に向かって言った。「安心しろ！俺達はやったんだ！チャンスをモノにしたんだぞ！助かる！」
「・・・本当ですかい？」
「あぁ本当だ！くそっ！それにしてもイラつくぜ！おい！降ろせって言っているだろ！」
闇の中に綺麗なスーパーボールの光が浮いている。どれくらいの時間そうしていたのだろうか。十秒、二十秒、三十秒いや数分間？
時間を忘れそうになる。
振り子は随分とその勢いを無くして止まりつつある。
「くそ！おい、お前もあのピエロを呼ぶんだ！」俺は男に呼びかけた。
「はぁ、はい・・・」
消えてなくなりそうな返事が返ってくる。その声にはっとした。男の握った手が震えている。しかも伝わってくる心臓の音も速くなっている。はちきれそう勢いで俺の心臓も強く打ち出した。
「おい！どうした？震えてるぞ！」俺は言った。
「旦那ぁ離さないで。はぁはぁ、助けて。はぁはぁ」
息も荒くなっている。さらにスポットライトに照らされた男の顔に驚いた。その顔は熟れたトマトのように赤く、丸く変化している。さらに顔には至るところに玉のような汗が噴出しているではないか。

「落ち着け！もうすぐだ！」
俺は焦った。すでに男の鼓動は感じられなかった。
「おい！ピエロ！早く！降ろせ！早く、早く！」
下を見ると俺はさらに驚いた。数十メートルくらいだった高さが遥かに高くなっているのだ。下からプレッシャーをかけて俺達を落とすつもりらしい。
「もう駄目だ・・・」男がぽつりと言う。
「何言ってる！・・・はっ・・・！おい！汗をかいてるぞ！すごい汗だ！落ち着け！手が、手が滑る！」
俺達二人の繋がった手にじっとりと汗が浮かぶ。男にはほとんど握力は感じられない。
「もう駄目だぁ・・・腕が痺れ・・・それ、に頭も痛・・・助け・・・」
「大丈夫だ！」俺は力強く言った。「大丈夫だ・・・」

その四

言葉には根拠など全くなかった。手の汗は酷くなるばかりで、手にオイルを塗っているかのようだ。もしくは俺が殺した奴らの血のようにどろっとしていて滑る。もしかしたら本当は血だったんじゃあないか、なんて思ったりもするんだが、何せスポットライトが見事に照らすものだから、確証はないんだ。

「俺はちゃんと寝たよ、三時間も。酒は抜けてるんだ。それなのに・・・どうして無理やり検問なんかするんだ！あんなことしなければ事故は起きなかったんだぁ・・・」男が言った。男の声には涙と嗚咽が混じっていた。

俺は慰めようなどとすでに思っていなかった。そんなことは無駄だ。ただ必死に男の手に掴まった。

「離すなよ！お前！」

「旦那ぁこのままじゃ二人とも落ちちまう。・・・あんたさっきあの恐ろしいピエロに『俺を降ろせ』って叫んでたよなぁ、確か。つまり俺を助けるつもりはないんだな？そうだな？・・・なぁ旦那ぁ降りてくれよ・・・」

俺の背中に寒気が走った。

「馬鹿言うな！二人してじゃないと俺は助からないんだ！よく考えろ！くそ！」俺は叫んだ。

だが男の耳には届いていない。

「・・・俺？二度だ・・・二度目だな？」俺は呟いて首を振った。

「・・・一人なら支えられる・・・一人なら・・・はぁはぁ俺は悪

くないぞぉぉぉ」
どれだけ強く掴もうとしても汗のせい（もしくは血のせい）でずるずると手が抜けていく。俺は何かを男に叫ぼうとした。ピエロにだったのかも。ひょっとしたら叫んでいたかもしれない。覚えていない。覚えていることは手が離れたことだけだ。
スローモーションのようだった。
俺がもう一人別の場所にいて、第三者となって自身を見ているように色んな角度から自分が見える。ゆっくりと、怯えた顔（殺した二人のような顔）で落ちていく俺自身。受け手の男は半分白目を剥いて、口元をひくつかせながら笑っている。
高いところからスポットライトの灯りが俺だけを射していた。何も音が聞こえず何も感じなかった。風さえも。

＊

土砂降りの雨がコンクリートの床を打つ音。電波を引いていないテレビの騒音、砂嵐のような音。一説によるとこのテレビの砂嵐の音は母親の腹の中、羊水の中の音で、誰もが胎児であったころ聞いたことのある音のため、特に小さな子供は落ち着くのだそうだが。とにかく俺はこの土砂降りの雨の音の中で目が覚めた。
「俺は何をやっているんだ・・・？」
殺風景な冷たい部屋。コンクリートの打ちっぱなしの部屋。鉄のドアが一つあり、部屋の隅に鉄格子がはめてある。そこから外の光が入ってきていて、ついでに幾らか雨も吹き込んでいる。部屋の中央には小さなデスクがありその前の椅子に俺は座っていた。対面した席に、あのアパートに乗り込んできた刑事が座っている。卓上のライトが俺の顔を照らしてくれたおかげで、そこは空中ブランコの台の上ではないと分かった。
そこは取調室だった。
俺は窓から飛び降りられず、結局警察に捕まったのだろうか。今

がいつかは分からないが（あのときはイライラするくらいに晴れて暑かった）俺はこうして警察で取調べを受けようとしている。もちろん殺人容疑で。だが正直ほっとしたのは確かだ。空中ブランコの恐怖に比べれば。あのピエロに比べれば。

あれは夢だった。

「夢・・・か？」呟いた。

シャツは汗で体に張り付いて気持ち悪く、雨の湿気がさらに気持ち悪くさせていた。そして寒かった。それから声を張り上げて笑った。警官は手に持ったペンでデスクを叩きながら俺を見つめた。照明の陰に隠れて俺を見るその目は、哀れなもの、嫌悪するものを見るときのそれだった。

「お前が何を見たかは知らないが、初めるぞ？いいか？」刑事が言う。

「はい・・・それにしても少し寒くないですかね、この部屋？」俺は調子よく答えた。

両手で体を擦った。そして刑事を見やったが、刑事は何も答えない。それどころか俺を無視するかのように、手元の資料にペンで書きたくっている。俺は黙ってその様子を見ていた。

しばらくして刑事が書き終わると、デスクの上の照明をずらして、俺達二人のちょうど中間を照らした。刑事の顔が照らされて浮かび、目のところにだけ影が落ちている。雨は止むことなく降っている。

刑事は突然話し出した。

「人は罪を償わなければならない。相応の」

「えっ？」俺は驚いた声を上げて乗り出した。

「チャンスは一度きりだ。お前は失敗したな？罪を償ってもらうぞ！」かすれた声。

俺はわけの分からない悲鳴を上げて、飛び上がったかと思うと、椅子から転げ落ちた。体を引きずって壁まで達した。壁には気がつかなかったが緑色の短い苔が生えている。上からは吹き込む雨が降りかかる。

何という驚きだったろうか。照明の下の刑事の顔がいつの間にかあのピエロの顔になっているのだ。ペンだと思っていたのは、奴の細長い指だった。頭の朱色のちぢれっ毛は暗がりの中で茶色くなっている。

ピエロは立ち上がって俺を見降ろしている。俺はサーカス場のことを思い出していた。あの光り輝く場所は夢ではなかったのだろうか？あの労働者風の男も俺と同じように？

「貴様の運命は振り子によって決まった！」ピエロが不気味に叫んだ。

目の前が次第に薄れていく。

全ての感覚が消える。

＊

「こいつはもう駄目だな。救急車はまだか？もう必要ないがな・・・」

スーツ姿の刑事が死体を目の前にして話している。額からは汗を流し、屈みながら死体の前に座り込んでいる。汗の雫が一滴、死体の上に落ちた。刑事の顔は歪んでいるが暑さからか、死体を見たからだろうか。

「もうすぐ来るそうです」若い刑事がスーツの刑事に言った。若い刑事は背広を脱いでYシャツになっているが、背中には汗の模様が浮かんでいた。

「そうか・・・」とスーツの刑事。「しかし、こいつは・・・まぁ、運が悪かったとしか言えんな・・・」

二人の刑事は立ち上がって死体を見下ろし、何も言わずに目を瞑って手を合わせた。

死体は茂った雑草の中に顔を埋め、木漏れ日がその体の上に揺れている。コンクリート塀にはまだ新しい深紅の血が付いている。

その死体は俺の死体だった。そして俺はその死体を刑事の真後ろ

に立って見ていた。
俺は恐ろしかったが、だがしかし冷静だった。
心臓の音は聞こえない。
遠くに救急車のサイレンが聞こえた。
蝉の鳴き声だけはやけにうるさかった。

＊

これが俺が体験した奇妙な話の一部始終だ。俺は今は幽霊となってこの場所にいる。どうやら離れられないらしい。自縛霊とは少し違うと思うが、詳しくは分からない。
ピエロは死よりも恐ろしいこと、などと言っていたが、それが最近になってようやく分かりかけてきた。腹が減るし喉も渇く。だが何も触ることなんて出来ないしもちろん食べることも出来ない。話していないと頭痛が酷く耐えられなくなる。それにあのピエロの影に怯えることもしばしばある。多分永遠だろう。俺はこの場所から離れられないんだと、最近認めたばかりだ。そして成仏出来ないんだということも認めるしかなかった。
人が死ぬことは肉体と、それから魂までもが死んで初めて死ぬということなんだと思う。魂までもが死んで、あの世へ行って、そしてようやく救われる。だから俺は死ぬことは出来ない。
最近道路の向こうに首吊り女の霊が現れた。四六時中あの状態のままでもがいている。俺はあの状態よりはずっとマシな方だと思うことにした。
奇妙だが決して俺だけの話ではない。あの労働者風の男も首吊りの霊もきっと同じように何かを味わってこうしているに違いない。みなにも起こらないとは言い切れない。いや死ぬ前には罪を償わなければならないのかも。誰もがだ。
俺には叶わなかったが、誰かに理解される一番の方法は素直に笑いかけることだと思う。高尚上品な笑いは必要ない。笑うのが苦手

なら鏡の前で不細工な面と格闘するんだな。それでも駄目なら誰か愛する人間を見つけるのが手っ取り早い。そうすれば笑えるに違いない。それでも駄目なら俺と同じ道を辿るかい？

今度もしピエロに会えたら音楽くらいは聴けるように交渉してみたいと思う。なるべく静かな音楽がいい。

ところで永遠はいつになったら終わるのだろう。

知っている奴はいるかい？

その四（後書き）

ありがとうございました。
「走り出したら止まらない」了です。
誰もが自信で納得ができないような体験をしたことが、一度はあると思います。
それを他人に言う人もいれば、胸にしまっている人もいるでしょう。
この話たちに共通して言えるのは、他人からしたらどれもB級の作り話に聞こえるんじゃないでしょうか？
だから面白いのだと思います。
現実から非現実の世界への交差を、スピード感が出るように書いてみました。
感想を聞かせてもらえたら嬉しいな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3315i/

走り出したら止まらない

2010年10月8日14時22分発行